



参考 地域から世界へ

ものづくりで未来を変える

関根 由子

日本各地では、職人の技による地域の特性を生かした「伝統的な工芸品」が数多く生産されています。その生産量は一九八〇年代がピークでしたが、しだいに減少し、二〇一四年頃にはその五分の一にまで落ちこみました。その結果、職人の収入も減少し、多くの産業で後継者が集まらず、深刻な問題になっています。

しかし、「伝統的な工芸品」に新たな魅力を見だし、その状況を新しい視点で変えようと動き始めた人たちがいます。

新たな素材や技法で世界に挑戦

村瀬裕さんは、愛知県名古屋市の有松・鳴海地区に伝わる「有松・鳴海絞り」を今に伝える職人です。「絞り」とは「絞り染

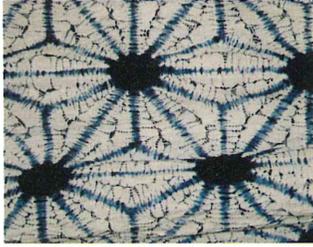
め」と呼ばれる染めの技法です。

模様の元となる図案を型紙に描き、それを木綿や絹に青花で絵刷りを行い、模様に合わせて布の一部を糸で縛ります。これを「くくり」といいます。染料に漬けると、縛ったところだけ染料がしみ込まないので、糸を外すとそれが模様となるのです。

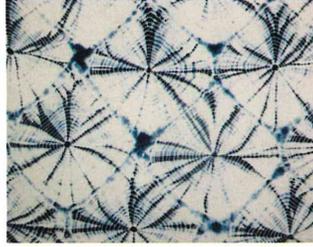
「有松・鳴海絞り」は江戸時代から四百年以上にわたり、手ぬぐ



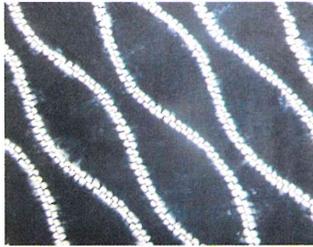
▼「有松・鳴海絞り」の模様の例



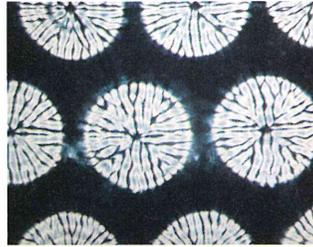
巻き上げ絞り



てくも
手蜘蛛絞り



おまがり
折り縫い絞り



からまつ
唐松絞り

いや浴衣、着物などに使われてきました。一九七〇年頃に全体の生産量のピークを迎えましたが、着物離れや海外に委託して作られた安い商品の流入により、一九八〇年頃から徐々に衰退していききました。それにより、国内の「絞り」の仕事量も失われて、かつて百種類以上ともいわれた模様の種類も、現在では七十種類ぐらいまでに減ってしまいました。

15

10

5

村瀬さんは、絞りの下絵図案を布に刷り込む「型彫絵刷師」です。多くの伝統的な工芸品がそうであるように、「有松・鳴海絞り」もまた、工程ごとに専門の職人がいます。そのため、工程の中のどこかが継承できなくなると、工芸品全体が消えてしまうこともあります。

「絞り」は、模様によって加工方法と道具が違うため、模様ごとに糸で縛る専門の「くくり手」がいます。後継者が減ったために、技術が受け継がれず、多くの模様が消えてしまいました。一九九二（平成四）年、日本で「第一回 国際絞り会議」が開かれました。会議に実行委員として参加した村瀬さんは、各国から集まった「絞り」職人から、「有松・鳴海絞り」が高い技術をもっていること、その技術を限られた地域の伝統にとどめず、産



村瀬裕さん

*青花

*絵刷り P 218 下3

「絵刷り」は、絞りの模様を布に刷り込む作業。「青花」は、ツユクサの青い色素を和紙にしみ込ませたもの。

▼「有松・鳴海絞り」 の工程から



布を糸でくくる作業の様子



染めたあとにくくっていた糸
をとった布



「月に雁染分秋草文様着物」
(明治時代)

複数の絞りの模様を組み合わせ
て、複雑な絵柄を作っている。



新しい素材と絞りの技法を組み
合わせて作り出した照明器具。

業として現代につながっていることが世界的にも貴重であることを教えられました。海外の職人からも、「有松・鳴海の技術を、言葉だけでなく、実技や体験として学びたい。」という要望が寄せられたため、村瀬さんは欧米の各地で、展示会や技術を実際に見せる展示会やワークショップを開催しました。このような取り組みをおして、村瀬さんは、「あえて『和』に固執せず、新しい分野で、しかも海外で認められることが、日本での価値観を変えらる。」と考えました。

そのため、海外での需要を考え、息子の村瀬弘行さんがドイツで設立した会社とともに、有松・鳴海絞りを生かした海外での商品開発や宣伝を工夫していきました。その方法として、絞りに使う素材を見直し、それまでは使っていなかったウールやカシミア

ア、アルパカなどを素材に、ストールやセーター、ワンピースなどを作りました。洋服だけでなく、クッションなども作りました。すると、「これが有松・鳴海絞り？」と驚かれるほどイメージが変わり、ついには世界のファッション界でも注目され、需要の拡大につながりました。

また、絞りの技法も工夫しました。今までの絞りは、模様を染めたあと、布のしわを伸ばして製品化していましたが、素材にポリエステルを使うと、一度しわを寄せて高温と高圧をかければ形状が残ります。そこで、絞ったしわをそのまま残して立体的な造形に仕上げ、絞り独特のユニークな突起のある照明を作ったのです。

こうして、「有松・鳴海絞り」の職人たちも海外での評価に手

応えを感じ、その誇りを自信として、国内外の活動を行っていき
ました。さらに、海外からも、絞りの研修を志願する多くの人が
集まってきたのです。

村瀬さんは、これからも、新しい素材や技術と伝統的なものづ
くりを融合させ、発想の転換をはかっていきたいと考えています。
また、地元の幼稚園や小中学校に出向いたり、工房を見学しても
らったりして、子どもたちに「絞り」の技術を紹介しています。
そこでは子どもたちに、「今日の体験で、作る喜びを感じてほし
い。それが、地域の文化や伝統としてつながっていることを誇り
に思うこと。さらにその体験を生かし、世界を視野に入れて考え
てみること。」と伝えていきます。

売り方と見せ方を変えて、製品をぎわだたせる

小林新也さんは、兵庫県小野市に住むデザイナーです。

小野市は家庭用はさみの産地です。握りばさみ、裁ちばさみ、
キッチンばさみなど、一般用からプロ向けまで多種多様なはさみ
が、長い間に培われてきた鍛冶職人の勘と技術によって生産され
ています。

はさみの多くは縫製に使われますが、一九〇〇年代の終わり、

平成になった頃から日本の縫製工
場がアジアなど海外に移転して、

一気に国内の需要がなくなり、価
格が下がりはじめました。同時に海
外製で安価なはさみが出回り、そ
の安さに対抗しようとますます安
くするという悪循環に陥ってい
ました。

そのような時、小林さんは、地
元の問屋の組合から、売れるよう
な新しいはさみのデザインを頼ま
れました。ところが、地元の伝統
的な工芸品についてよく知らない
ことに気づき、職人のところに連



握りばさみ



小林新也さん

*ウールやカシミア、アルパカ P.220上12
ヒツジ、カシミアヤギ、アルパカという動物の毛から作った毛糸。

*縫製 P.221上19
布などを縫い合わせて洋服を作ること。

れていってもらいました。そこで、製品としてはこれ以上進歩のしようがないくらい、美しく切れ味のよい刃物が既に造られていることと、職人の高齢化と後継者がいない現実を知りました。

「いいものは高くても売れるということに気づかないといけない。」「この地域で、こんなにすばらしい刃物をいろいろ造っていることが、もつと多くの人に見えるようにしましょう。」

小林さんはこう思い、それまで鎌や包丁といった日用で使う刃物と一緒に売っていたはさみを、他の製品と区別することにしました。産地を代表する十種類のはさみなどを一括して播州の刃物であるという商標を

つけ、包装する箱も一新しました。そして、裁ちばさみには布など、商品と切る対象物の写真を一对一で組み合わせたデザインのカタログやホームページを作り、東京の展示会に使用しました。また、今あ



小林さんがデザインしたカタログ

5

る握りばさみに色をつけて新しきを出すなど、製品にも工夫を施しました。すると、日本だけでなく海外の人の目をひくこととなり、パリでの展示、アムステルダムでの出店へとつながりました。言葉だけではなく、他の刃物との違いを視覚的に表すことで、商品のよさが伝わったのです。

さらに、小林さんは、自宅を改装し、職人志望の人が学べる工房を作りました。ここで職人は、一人の師匠につくのではなく、わからないことがあれば職人を訪ねて教えを請うという、地域の職人がみんなの師匠となって、後継者づくりを進めています。

10

小林さんは、「まずはなんでもいいから自分の国の文化を身につけたほうがいい。それが基準となつて、『改めて自分の国はこうだ。』と気づくことができる。また、自国の文化を大事にしていると、相手もそれを大事にしてくれる。」と言います。

職人を生かし、町を生かす

山川智嗣さんは、富山県富山市生まれの建築家です。そして今、県内の南砺市井波地域に住み、「井波彫刻」の魅力を国内外に発信しています。

二百本以上のノミと彫刻刀を駆使して欄間などの工芸品を生み

出す「井波彫刻」は、江戸時代
の中期から、京都の宮大工*の技
術を受け継いで発展してきました。
た。井波地域では現在も、人口
約八千人の町に二百人ほどの彫



山川智嗣さん

刻師がいて、彫刻師の組合が学校を作り、後継者の育成も続けて
います。その技術は、二〇一八（平成三十）年の名古屋城本丸御
殿復元の際、井波の職人による欄間の制作にも生かされました。

ところが住宅様式が変わり、欄間の需要も少なくなりました。

以前は百二十軒近くあった工房も年々減少し、町には空き家も増
えてきました。

山川さんはその空き家に着目して、宿泊施設と、木彫体験が
できる宿泊プランを作りました。宿泊者は、好きな体験コースを
選び、職人の工房で直接、彫刻の手ほどきを受けながら、作品作
りが楽しめます。

このプランは年間千人ほどの利用者があり、そのうちの約七割
が外国人です。特にヨーロッパ系の映画監督やインテリアデザイ
ナーなど、ものづくりに関わる人たちに人気があります。彼らが
インターネットで感想を世界に発信し、それが新たな宿泊客を呼

んでいるのです。

さらに山川さんは、井波地域のみで使えるアプリを開発しまし
た。宿では食事を提供せず、観光客はこのアプリで、レストラン
や工房、銭湯などの情報を得て、町の中を楽しむことができます。
職人たちが、海外からの観光客など新しい需要を見い出して、
自分たちで収入を得ていくことができる、職人の技術をもとにし
た町づくりを、山川さんは模索しています。

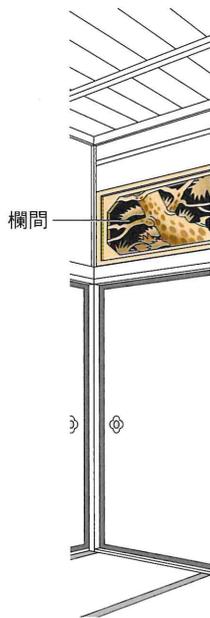
「井波彫刻は、新しいものをずっと作り続けてきた。決まった型

*播州 P 222 上 9

兵庫県南西部の地域の呼び名。

*欄間 P 222 下 19

日本建築で、障子やふすまと天井の間に設ける、明かり取りや通気の
ための部分。

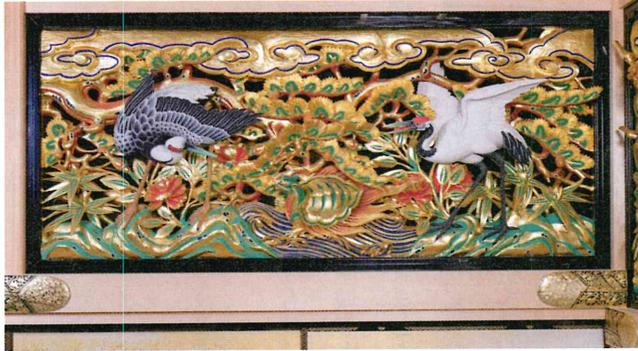


*宮大工 P 223 上 2

神社や寺などの建築や修理をする大工。



職人に教わりながら木彫作業をする観光客



井波彫刻師の技で復元された名古屋城本丸御殿の欄間



関根 由子「一九四六」

東京都に生まれた。元新聞記者。

著書に『伝統工芸を継ぐ女たち』『伝統工芸を継ぐ男たち』などがある。

《出典》本書のために書きおろしたものである。

がなく、職人どうしが競^{きま}って技術を高めて、なんでも彫れる。だからこそ、井波彫刻としての価値が残ってきた。」「建築家の役割として、地元の職人を生かし、空き家も生かし、地域全体の活性化を目ざしたい。」と、山川さんは言います。

三人の活動はいずれも、地元の伝統的なものづくりを支える確

5

かな技術を改めて見直すことから始まりました。さらに、「伝統」を大切に考えながらもその点にのみ縛られず、世界という新しい視点を取り入れたことで、それまで気づかなかったさらなる魅力を見いだし、地域を越^こえて若い世代の人や外国人などの新たな需要へとつなげることになったのです。